

令和6年度第3回仙台市若林区区民協働まちづくり事業評価委員会  
令和7年度仙台市若林区まちづくり活動助成申込事業 計画説明会 議事要旨

日 時：令和7年3月1日(土) 9:00～12:00

会 場：若林区役所4階 第2・第3会議室

出席者：針生委員長、田澤副委員長、神坂委員、玉渕委員、  
高橋委員、菅原委員  
若林区役所まちづくり推進課事務局

1. 開会

評価委員の紹介、概要説明

2. 申込事業計画説明及び質疑応答

(1) 事業名：AWESOME PORT プロジェクト

団体名：オーサム・ポート

<プレゼン概要>

- ・荒井のコミュニティカフェがあった場所を活用し、学校へ行かない選択をした子どもたちやその親たちの居場所、交流の場づくりを行い、各種イベントも開催する。
- ・若者だけに留まらず、子育て世代、高齢者、地域企業など多様な世代が関わり、地域内の課題解決に繋がる機会を創出する。

<質疑・意見>

- Q 活動内容にある「若者たちの「やってみたい」が社会と繋がる機会の創出」について、スケジュールや事業費用に具体的なことが示されていないが、団体が子供たちの機会を創るのか、活動の中での偶発性に委ねているのか方針を教えてください。
- A 子どもたちの自発性を尊重したいと考えているが、まずは「あらい七夕夏まつり」や「七夕制作」「市民ライターとしてミニコミ誌の作成」など、自由に参加できるコンテンツを集めて、子どもたちが選択するという枠組みで実施したい。
- Q そうなると、スケジュールは流動的になるのか。
- A 市民ライターとしてのミニコミ誌発行は年間を通していつでも参加できる。夏まつりは8月に開催するのでその前の参加になる。七夕作りは4月頃から参加可能。まち歩きのイベントは5月、6月を予定しているが日程が決まり次第、参加者を募る予定である。
- Q 「オーサムポートフェスティバル」の会場や開催期間について教えて欲しい。
- A 会場は昨年同様仙台 GIGS を予定しているが、予約できなかった場合は若林区の他の会場を検討したい。「やってみたいをやるワークショップ」が終わる夏過ぎから秋にかけて企画を練り、発表の練習時間とする予定。フェスティバルの開催期間は1日である。
- Q 子どもの中には親御さんがあまり関わらない場合もあるのか。
- A 親子一緒に関わる場合、子どもだけ関わっている場合とそれぞれである。

- Q 将来的な展望として、親のサポートも活動の中に含まれているのか。
- A 地域食堂「アライメン」に集う方々が増えており、多くの繋がりが生まれている。その中で、参加する親同士が相談しやすい存在になっていたり、自分自身も心理学を学んでいるので、親のサポートも行っていきたい。
- Q 企業にも活動の見学や参加を呼びかけると記載されているが、どのような形で企業にアプローチし、何社位が参加するのか教えていただきたい。
- A 先日の事業報告会の際にご意見をいただき、企業へのアプローチは自分たちになかった発想であり、子どもたちの将来にとって非常に重要なことであると感じた。まずは、近隣の企業にオーサム・ポートフェスティバルの開催案内を送付し、子どもたちがどういう表現をするのか見学してもらいたい。また、まち歩きイベントで気軽に立ち寄れる場として企業の協力を得たいとも考えている。このプロジェクトをサポートしてくれている企業の役員の方もいらっしゃるので、人事担当の方とも繋がりを作り、将来的には採用に繋げるなど、まずは協力してくれる方に事業の内容を伝えていきたい。
- Q チャセゴウォークとはどのような活動か。
- A 元々荒浜地域にあった文化で子どもたちがお家を回るとというのが慣習としてあった。そのチャセゴウォークをまちづくりの一環として取り組めないかと思い、今年から子どもたちと企業の顔の見える関係づくりとして、地域内の10か所の企業に「子どもたちが企業を回るのでお菓子を配って欲しい」とお願いして実施した活動である。本活動も企業に理解していただく活動の1つだと考えている。

## (2) 事業名：親子で学ぼう情報リテラシー教室

団体名：TGU 情報リテラシー教室

### <プレゼン概要>

- ・「著作権への対応」「個人情報保護」「健康への配慮」などをテーマに、子ども達が ICT を適切に使いこなすことができるよう、月に1度、親子向けの講座を開講する。

### 【質疑概要】

- Q 最新の ICT を活用することも重要であるが、危険な情報へのアクセスや発信のリスクも問題となっているので、そのようなことも伝えていく絶好の機会だと思うが、それについての考えを教えて欲しい。
- A 来年度、全10回の講座を予定しており、各回でテーマを設定する。テーマは ICT の活用能力を題材とするテーマもあるが、情報のリスクを考えるテーマも設定する予定であり、様々な分野の講座を実施する予定である。
- Q 参加者は毎回同じか。それとも、毎回募集をして違う方が参加するのか。
- A 毎回参加していただく方もいれば、数か月後にまた参加していただける方もいる。
- Q 受講人数に制限があると思うが、延べ人数でどれ位の方が受講できるのか。

A 各回20人で10回の講座を予定しているので、延べ200人は受講可能である。

Q 情報リテラシーの向上を目的としているが、このような教室に参加される方は、親の意識が高い子どもが参加する傾向にあると思われる。あまり必要性を感じていない方々へのアプローチはどのように考えているのか。

A 活動の1つとして出前授業を行ってるが、今年度は市民協働推進課の「ユースチャレンジ！コラボプロジェクト」採択事業として、市政だよりへ掲載したところ、学校から「是非、出前授業を行って欲しい」と依頼があり、情報リテラシー教室を開催した。そういった活動でアプローチをしていきたい。

Q 専門的な知見を有する団体のメンバーが、大学を飛び出し、地域あるいは学校にその力を還元しようとする活動は非常に素晴らしいことである。これからもこの活動を広めていただきたい。1つ気になったのは、収支予算の保険料の部分で500円×60名で試算しているが、10回教室をするとすると、6人分の保険しか掛けられないのではないのか。

A 保険料については、参加者の保険料ではなく、団体の保険料である。

**意見** 情報リテラシーの能力を高めるという意味では、子どもだけでなく、大人や高齢者も必要であり、市民センターや町内会、老人クラブなど多くの団体と連携を進めて欲しい。

Q どのような点が「まちづくり」と認識しているか説明して欲しい。

A 自分たちの力だけでは参加者を募ることが難しく、今年度は仙台市教育委員会とも協働で実施したが、広報面で非常に苦労した。今後は地域の方々との関りの中で、情報リテラシーの大切さを地域に発信していきたい。

Q 協力体制ではなく、この事業のどの点がまちづくりだと認識しながら進めているのか教えていただきたい。

A 子どもたちがAI社会に対して生き抜く力を育成することにより、地域社会に貢献できる人材を生み出したいと思っている。

Q パンフレット代として、15万円で計上されているが、どのような用途で制作するのか。

A 企業や他団体から自分たちの活動に興味を持ってもらうことが多々あることから、自分たちの活動を視覚化する意味で制作予定である。

Q 説明の中で、動画を作成するとの話があったが、具体的にどのような団体と連携して動画を作るのか。

A 今年度に引き続き、「NPO法人メディアージ」に編集の技術を教えてもらったり、カメラや会場を貸してもらいながら制作予定である。

Q 講座の内容を録画し、配信するのか。

A 講座を録画するのではなくて、講座で学ぶ内容を制作、編集し、配信する。

Q どのような媒体で配信するのか。

A YouTube チャンネルで配信予定である。

Q 講座を録画し配信するのではなく、別に講座の内容を制作するのはどのような意図か。

A 講座のチラシを小学校の教頭先生へお渡ししているが、自分たちの活動が分からない中でチラシを配布するのは難しいというご意見をいただいたことがあり、そういった先生向けにオンデマンドコンテンツを作成しようと思っている。

**意見** 自らが親として、スマートフォンで有害サイトに誘導されないかなど、子どものインターネットの使い方は非常に心配ある。それを防ぐためにはどうしたら良いか分からない親向けのニーズは高いと思うので、是非検討をお願いしたい。

Q 区民まつりや大学祭への出店は活動資金調達のためか。

A 活動認知のためである。

(3) 事業名：地域の児童を対象にした PC 教室と子どもの食事調査献立開発(若林区子どもメニュー)事業

団体名：一般社団法人アスリートアトラス

＜プレゼン概要＞

- ・若林区児童の肥満率改善、PCに触れる機会の創出、南小泉地域の居場所づくりを目的として、月に1度、子ども向けのプログラミング教室を開催し、食事調査も実施する。その調査結果を基に、独自の若林区子どもメニューを開発する。主な会場となるカフェは子どもたちの居場所として開放する。

#### 【質疑概要】

Q 若林区の子どもメニューを作成するとあるが、何を基準として若林区の子どもメニューとするのか教えていただきたい。

A 以前、仙台市議会議員の方々を集めてカフェで意見交換したところ、4号線を境に体型の違いがあると聞いた。おそらく、電車を利用する地域と車の送り迎えをする地域で多少カロリー消費の差があると思うが、例えば、4号線の内側と外側でメニューを変えるなどが考えられるが、現段階では調査するところから始まっているので、意見を聞きながら柔軟に対応していきたいと思っている。

Q 地域貢献を謳っているのであれば、地場の食材を使ったメニューということも考えられるが、その点についてはどのように考えているか。

A 社会福祉法人にお願いし、根白石のわくわくファームで自社が使う野菜を育てていただきフェアトレードで購入したり、蔵王町の福祉会が農園で育てている野菜を発注したり、そういったルートで野菜を仕入れている。

Q 教室の参加費はいくらか。それと、費用のほとんどがパソコンのリース代であるが、助成終了後のリース費用はどのように工面するのか。

A 参加費は無料で考えている。自社のシステムを利用し、企業側から広告宣伝費を頂き、

その資金を活用する。パソコンについては、経営しているIT会社の減価償却が終了したスペックの高いパソコンを使う予定であり、3年目以降も継続して事業を行える。

Q 若林区も野菜の栽培が非常に盛んであり、復興も兼ねて取り組んでいる方が沢山いる。是非ご活用願いたい。

A 出会いの中でそのようなお話があればどんどん受けていきたい。今回はモデルケースとして実施し、今後はそれぞれの地域課題に合わせ、今回のモデルケースを活用しながら展開していきたい。若林区内の食材を使うことは、子どもたちに提供する上で非常に関係性があり、大事なことだと認識している。連携については、行政の力も借りていきたい。

Q 運営スタッフとして、学生や地域住民をメンバーに入れているが、参加の目途は立っているのか。それとも今から募集するのか。

A 学生に関しては、東北学院大学の学生と接点を作っている段階である。宮城学院大学栄養学科の学生とは既に連携しており、一部学生がメニューを作ったりもしているので、そういった方々に協力を得る予定である。地域住民との接点についてはまだこれからであるが、カフェのパートの方のコミュニティを活用し、地域のお母さんたちにも手伝ってもらい、お母さんたちの栄養の知識も深めていきたい。地域の小学校や中学校にも協力をいただければと考えている。

Q 多くの地域住民を巻き込んで地域づくりをしていくというイメージであったが、どちらかというと、その地域のお母さんたちが主体になるということか。

A まずは、成功事例を作りたいと考えている。成功事例を作るためには、信用のある地域で1つ事例を作ることが重要である。成功すれば、事業を見学してもらい、パターンをコピーしてもらえれば、好事例が普及していく。4号線を越えた地域は少し関係性が薄いと思っている。南小泉小学校や南小泉中学校、八軒中学校付近で成功させてから広く展開していきたい。なので、1年目から広く展開はせず、数年単位のプロジェクトとして考えている。

Q プログラミングを学ぶ機会を子どもに与えることで、成果発表の場は作らないのか。プログラミングと食事開発という2本立ての事業を展開することで、事業の成功は何か教えていただきたい。

A 子どもたちが学校の帰りにカフェに立ち寄り、プロテインを飲み気軽に立ち寄ってもらえることが1つの目的である。プログラミングに関しては、あくまで子どもたちに興味を持ってもらうための手法であり、本当のねらいは地域の食の改善なので、お父さんお母さんとの接点を持つということが1番の目的である。ただ、子どもに楽しいと思ってもらわないと、お父さんやお母さんも来てくれないので、遊びの場としてプログラミング教室を開催し、お父さんお母さんにも来てもらって、そこで管理栄養士が「お家のお食事どうですか」と会話がするような環境ができれば成功の1つだと思っている。子どもが安心、安全で、かつ、親も「行ってきたさい」と言えるような環境が望ましい。

Q 事業計画書では対象者が「若林区在住の子どもたち」と書かれているが、カフェに歩いて通える子どもたちという認識でよろしいか。

A 最初はそういった子どもたちが対象となる。但し、ミニバスケットボールやサッカークラブなどのスポーツ団体は、学校同士で合同で活動しているチームも多くなっており、スポーツは栄養面も重要なので、広域に展開できる可能性はあると思っている。

**意見** 栄養の課題は若林区行政でも取り組んでおり、地域によって個別の課題があるとする  
と、まずは敢えてエリアを絞って事業を実施し、その成果を他地域に広げていく方が  
良いと感じた。是非、ターゲットを改めて明確化して欲しい。

Q 食事のアンケートを取る対象者は子どもか。それともその親か。

A 現時点で考えているのは、子どもに対して食事の内容や回数についてのアンケートを  
取る予定である。